



青森県薬剤師会会長
木村 隆次
Ryuji Kimura

谷内 良英
Ryoei Taninai

川村 和宏
Kazuhiro Kawamura

小原 綾璃咲
Arisa Obara

薬局長
田村 健悦
Kenetsu Tamura

八戸市立市民病院 — 薬剤師座談会 — TALK SESSION

先輩たちが語る、
病院薬剤師として青森県で
働く魅力とは？

八戸市立市民病院の薬剤師と青森県薬剤師会の木村会長に青森県で働く魅力について話を伺いました。

高いレベルで仕事ができ 地域医療にも貢献できる

木村隆次青森県薬剤師会会長(以降、木村会長) …川村さん(東北薬科大学2014年卒)、谷内さん(東北薬科大学2015年卒)、小原さん(岩手医科大学2017年卒)は現在、八戸市立市民病院の薬剤師として活躍されていますが、地元である青森に戻って働こうと思ったのはなぜですか。

川村和宏さん(以降、川村さん) …青森に戻って来た理由は、父が薬局を営んでいることもあり、就職活動時期は、薬局薬剤師か病院薬剤師で悩みましたが、当院での実習で臨床の薬学的管理を行ったことが印象深く、病院薬剤師として働きたいと思い当院に入職しました。現在、入職7年目で、3年目から救命救急センターの担当薬剤師をしています。

谷内良英さん(以降、谷内さん) …僕も当院で実習をしたことがきっかけです。それ以前は正直、都会で働きたいと思っていたんです

(笑)。仙台市内の病院へ見学に行ったりしていましたが、当院の実習で薬剤師が臨床現場で医師と協働しながら処方提案しているのを見て、「こんな薬剤師になりたい」と感じましたし、都会でなくても高いレベルで仕事ができ、地元にも貢献できると思ったからです。現在は6年目で、脳神経外科、抗菌薬適正使用支援チームを担当し、救命救急センターではサブの病棟担当をしています。

小原綾璃咲さん(以降、小原さん) …私も生まれ育った八戸市の地域医療に貢献したかったこと、当院でならたくさん症例を学ぶことができ、薬剤師として大きくスキルアップできると思い志望しました。現在4年目で、2020年から消化器科病棟の担当薬剤師をしています。

田村健悦 薬局長(以降、田村薬局長) …3人も向上心があり、やる気もあって勉強熱心ですね。当院には現在、常勤で26名の薬剤師が働いていますが、充足してはいないので仕事を兼務することも多いんです。若い方には新しいことに積極的にチャレンジしてほしいですし、たくさん活躍の場を提供する方針で、救命救急センターに薬剤師を配属する初めての

の試みにも、当時入職3年目だった川村さんを担当薬剤師として抜擢しました。

川村さん…配属当時は当院で初めてということもありましたし、救命救急センターは一般病棟と違い、意思疎通の難しい患者さんが多いので、どのように仕事をしていくのか悩みました。ですが、基本は大きく変わらず、次第に医師や看護師、多職種の方に相談されたり、したりという機会が増えていきました。救命救急センターでの診療は型にはまらないことが多く、治療が難しい患者さんが入室されます。日々勉強させられることも多いですね。

多彩な症例や多職種連携により 幅広く学べる環境も魅力

小原さん…当院は急性期病院なので、多彩な症例を学べるのが特徴ですね。それに、病棟業務、抗がん剤調製などを入職1年目の早くから経験させていただき、実際に処方提案が医師に受け入れられ、その薬が患者さんに使用されるという経験をしたことで、命に携わる責任の重さというものが早くに実感することができました。

TALK SESSION

先輩たちが語る、
病院薬剤師として青森県で
働く魅力とは？

川村さん…患者さんの入院から退院までの一連に関わることができますし、いろんな合併症を持つ患者さんも多く、包括的にいろんな病態を勉強することができますよね。病院薬剤師は多職種との連携や情報共有により、薬物療法以外の治療についても理解を深めながら患者さんに関わることができることも魅力です。

小原さん…多職種との連携や情報共有は日常的で、患者さんが退院後、外来診療に移ってからも薬の相談が先生から来ますし、看護師さんから薬の配合変化や投与速度など、わからないことがあれば直ぐに連絡が来ます。昇圧剤は救命救急センターで使われますが、病棟では初めてみる看護師さんもいるので、勉強会を頼まれることもあります。患者さんの治療を上手く進めるためには、一緒に治療していく医師や多職種の方々との連携が重要ですし、信頼され、相談される薬剤師になることが大切だと感じています。



谷内さん…僕は抗菌薬適正使用支援チームとして、感染症治療における抗菌薬の選択に関わっているので、担当の先生と意見や議論を交わすことは日常茶飯事です。検査結果、患者さんの背景、併用薬剤などを全て把握し、先生と意見や議論を交わしながら協働することで、副作用の出現のない最適な薬剤を提案することができますと実感しています。

田村薬局長…薬剤師として信頼されているからこそ医師や多職種の方々から意見を求められますし、相談されたり、議論を交わすことができます。多職種連携は患者さんに最適な医療

を提供するためにとても大切なことですよ。

川村さん…信頼され、仕事を任せていただくことで、普段から自分で考え、判断することも多く、薬剤師としての成長と大きな自信にも繋がっています。

小原さん…信頼され、相談されることで、患者さんの治療、つまり命に関わる責任もありますが、患者さんが元気に退院していく姿を見送ることができるのは何よりも嬉しいですし、大きなやりがいにもなっています。

谷内さん…やりがいは大きいですよ。患者さんが退院する際には「先生、看護師さんありがとうございます」と、薬剤師が言われる機会は少なくなくて心寂しいですが、お礼を言われた医師や看護師さんから「薬の相談ありがとう」、「提案してくれた患者さんの処方良かったみたい」と言われたときはとても嬉しいです。病院薬剤師として、患者さんが最も大変だと感じる急性期の治療を陰で支えることができ、それを実感することができる。当院に来て良かったと思っています。

多面的にみる力を養い、 患者さんの想いを実現する

木村会長…八戸市立市民病院では多彩な症例の患者さんに関わりますが、一人ひとりの患者さんに最適な処方や薬物治療を提供するには、個々の性格、生活背景、ご家族との関係など多面的にみることも薬剤師として重要になるとは思いますが、いかがですか。

川村さん…そうですね。やはり患者さんと積極的にコミュニケーションを取ることが大切だと思っています。救命救急科では、急性期から退院までを診ますが、急性期で何か月もよくならない患者さんもいます。薬のことに関係なく、毎日、話を聞いてあげたことで、なかなかよくならず気が滅入っていた患者さんが笑顔を見せ、元気を取り戻した経験が何度もあり、会話することの大切さを実感しています。

谷内さん…急性期という患者さんが一番苦し

いときに近くにいる話を聞いてあげることが大切ですよ。僕は必ず朝の回診に同行していますが、先生は手術があると参加できないこともあり、患者さんは毎日顔を見に来てくれる薬剤師に小さなことでも相談してくれるようになる。その内容を先生に伝えて治療が変わり、患者さんがよくなることがあります。

小原さん…それと、患者さんによっては本人が薬の管理をすることが難しいので、ご家族の協力が得られるのかどうかも重要です。退院時のタイミングなどでご家族とお話できるように看護師さんと連携しながら指導をしています。

谷内さん…病気のことだけではなく、患者さんの家族関係や生活状況など、背景にある部分を疎かにしてしまうと、一人ひとりに最適な処方や薬物治療の実現は難しいと思います。

川村さん…生活背景を考慮した結果、別の治療を提案することもあるなど、教科書やガイドラインに書いてあることが全てではないですよ。

田村薬局長…教科書やガイドラインはあくまでもツールですから、患者さん、ご家族の想いも汲み取った、一人ひとりの最適な治療を提案することが大事なんです。



経験できる幅は広く、 活躍の場も多く、働きやすい

木村会長…青森県は病院や薬局数に対して薬剤師が不足しています。若い方々は都会で働くことの憧れはあるだろうし、都会の病院

のほうが多くのことを学べると思っている方もいます。実際に青森で働いてみて、みなさんはどう感じていますか。

川村さん…青森は薬剤師が充足していない分、多くの仕事に関わることができず、任されることも多いので、病院薬剤師が患者さんにプラスになっていることを実感できません。一人ひとりが経験できることはとても多く、学んだことを活かす機会も豊富にあり、大きく成長できる環境だと感じています。

谷内さん…都会との距離的な問題や情報格差も、現在はインターネットがカバーしてくれますよね。



小原さん…最近ではコロナ禍によって学会、セミナー、勉強会などがウェブ上で行われるようになり、参加する際の距離的な問題はほとんどなくなりました。

田村薬局長…当院はネット環境が整っていることはもちろん、一人ひとりにノートパソコンも支給しているのでどこでも勉強できますし、各種学会や研修への参加機会が豊富にあることも特徴です。

谷内さん…学会発表などの機会は多く、先週も研究会で発表させていただき、先生方とディスカッションをするなど多くの刺激をもらいました。それが更なる勉強や仕事への意欲にも繋がっています。

木村会長…私が薬剤師になった頃は都市部と地方との情報格差がものすごくありましたが、みなさんが話されたように最近ではウェブを使った学会や勉強会など、場所を選ばず、タイムラグもなく参加できるようになり、都会との情報格差は全くないですね。働きやすさに関してはどう感じていますか。

小原さん…多職種とコミュニケーションも取りやすいですし、とても働きやすいと感じています。当院には院内保育園もあり、仕事と子育ての両立もしやすく、女性薬剤師も活躍で

きる環境だと感じています。

田村薬局長…以前は男性の薬剤師が多かったですが、最近は6:4で女性のほうが多く、子育て中の女性薬剤師も活躍できる環境が整っています。

谷内さん…オンとオフのメリハリを持って働けるのもいいですね。僕はオフの日はフットサルを楽しんでいます。所属チームは去年、アマチュアの東北大会で1位になりました。八戸三社大祭の後、チームでごみ拾いもしています。他にも養護学校の子どもたちにサッカーを教えたり、小学生のフットサルスクールの手伝いをするなど、オフも充実しています。

川村さん…僕はオフの日も薬剤師の勉強をしているんですよ。同僚からは「川村さんの趣味は薬剤師だから」とよく言われます(笑)。それだけ病院薬剤師というのはやりがいのある仕事なんですよ。



田村薬局長…病院薬剤師はさまざまな疾患を抱える患者さんの治療をサポートしなければなりません。勉強することも幅広く、得意、不得意を作らず、まずはジェネラリストであるべきだと思います。しっかりとしたジェネラリストベースを築いた上で、感染症、がん、精神や小児薬物療法などの専門性を高めていただき、一人ひとりの患者さんの想いを実現できる薬剤師になってほしいですね。幅広く経験できる青森でなら、そうした薬剤師になることができますし、大きなやりがいを日々感じることはできるはずですよ。

木村会長…若い3人の方々からこれまで経験してきたことや薬剤師としての考えを聞き、とても嬉しく感じました。青森であっても都会との情報格差はなく、活躍の場はむしろ多くあり、地域医療にも貢献できる。若い薬剤師さんにはもっともっとチャレンジしてほしいですし、学生の方々はもちろん、現在県外で働いている薬剤師の方も、ぜひ青森に来ていただき、薬剤師として大いに活躍してほしいと思います。



薬局長

田村 健悦

Kenetsu Tamura

北海道大学卒業 1991年卒



川村 和宏

Kazuhiro Kawamura

東北薬科大学卒業 2014年卒
(現 東北医科薬科大学)



谷内 良英

Ryohei Taninai

東北薬科大学卒業 2015年卒
(現 東北医科薬科大学)



小原 綾璃咲

Arisa Obara

岩手医科大学卒業 2017年卒

青森県薬剤師会
会長

木村 隆次

Ryuji Kimura

1982年3月城西大学薬学部卒業。同4月杏林薬品入社。1990年八口一薬局開設。2000年4月より日本薬剤師会常務理事。2005年11月より日本介護支援専門員協会会長(初代)。2010年4月より青森県薬剤師会会長現在に至る。